

道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 26 年度 第 1 号 2014 年 9 月 30 日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

平成 26 年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1 次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2014 年 8 月 26 日～9 月 1 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～500mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を大きく上回った。
- ・ 魚群反応の強い海域は登別～白老沖。
- ・ 反応の比較的強い水深は 250～350m（海底に張り付いた反応は 250m付近）。
- ・ 漁獲物は、尾叉長 40～50cm（主体は 45cm 前後）。
- ・ 200m以深の水温はほぼ平年並み。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振海域の 182、185 海区（登別～白老沖）には強い反応がありました。また、渡島海域の 192、197 海区（恵山岬沖）にも比較的強い反応がありました（図 1・2）。
2. 海域平均の反応量は、金星丸でこの調査を開始した 2001 年度以降では最も高い水準となりました（図 3）。
3. 魚群反応は、水深 150～500mの範囲に観察されました。特に水深 250～350m にかけて強い反応がみられましたが、海底に張り付いた反応は水深 250m 付近が中心となっていました（図 2・4）。
4. トロール調査の結果、水深 300m 付近の漁獲物は尾叉長 40～50cm（主体は 45cm 前後）のスケトウダラ成魚と尾叉長 10cm 前後の未成魚（今年度生まれの 0 歳魚）となっていました（図 5）。なお、苫小牧沖の漁獲物には、0 歳魚の割合が高かったものの、魚探反応に占める割合はサイズが小さいことからそれほど影響はないものと考えられます（図 1 および図 3 に示した反応量からは、未成魚とみられる反応を除いています）。
5. 調査海域（登別沖）の水温は、水深 200m 付近までは平年（2002～2013 年度のこの調査における平均値）よりもやや高かったものの、それ以深はほぼ平年並みとなっていました。スケトウダラの生息に好適とされる 5℃以下の水温は、水深 190m 以深にあり、昨年と同時期よりやや深い水深帯にみられました（図 6）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11 月）の状態を予測するために実施しているものです。12 月以降の状況は、11 月下旬に実施する分布調査（2 次調査）により予測する予定です。調査終了後にまたスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

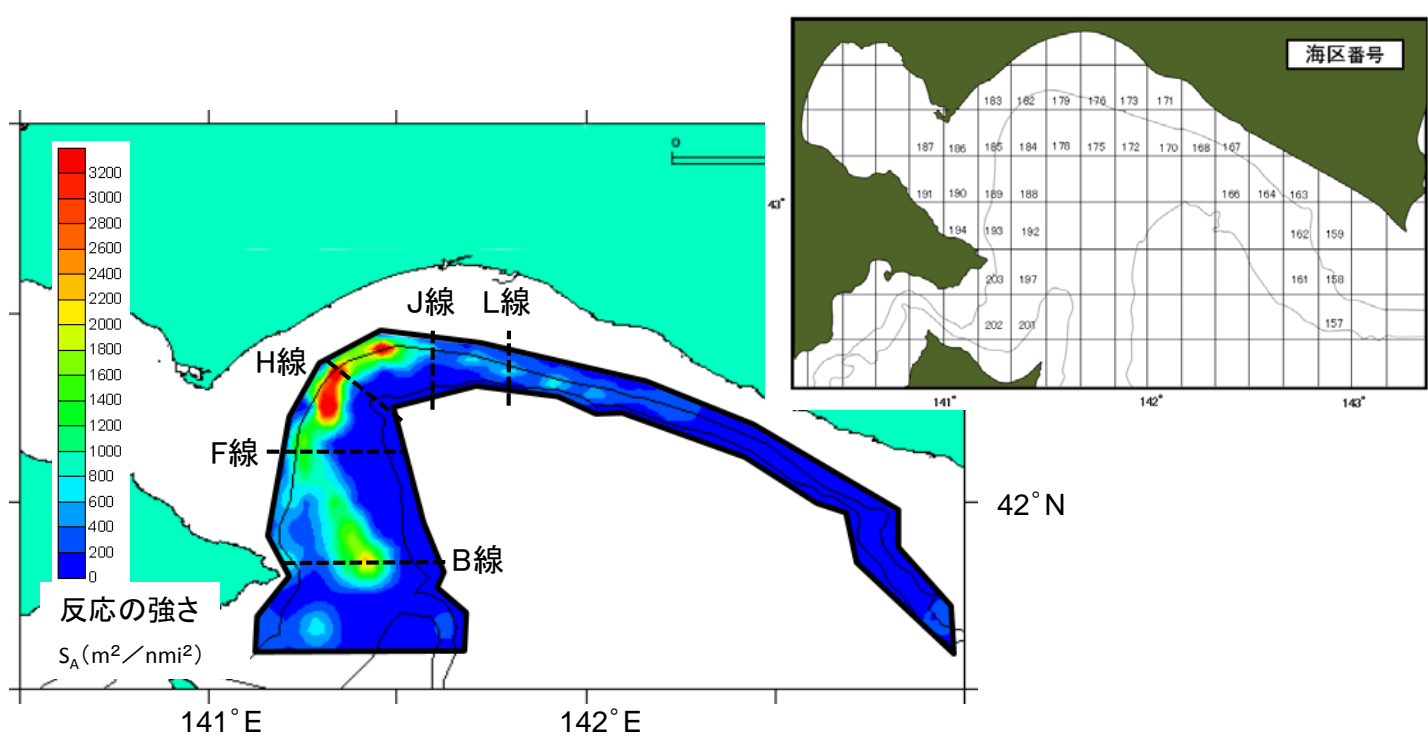


図1 調査海域における魚群の分布

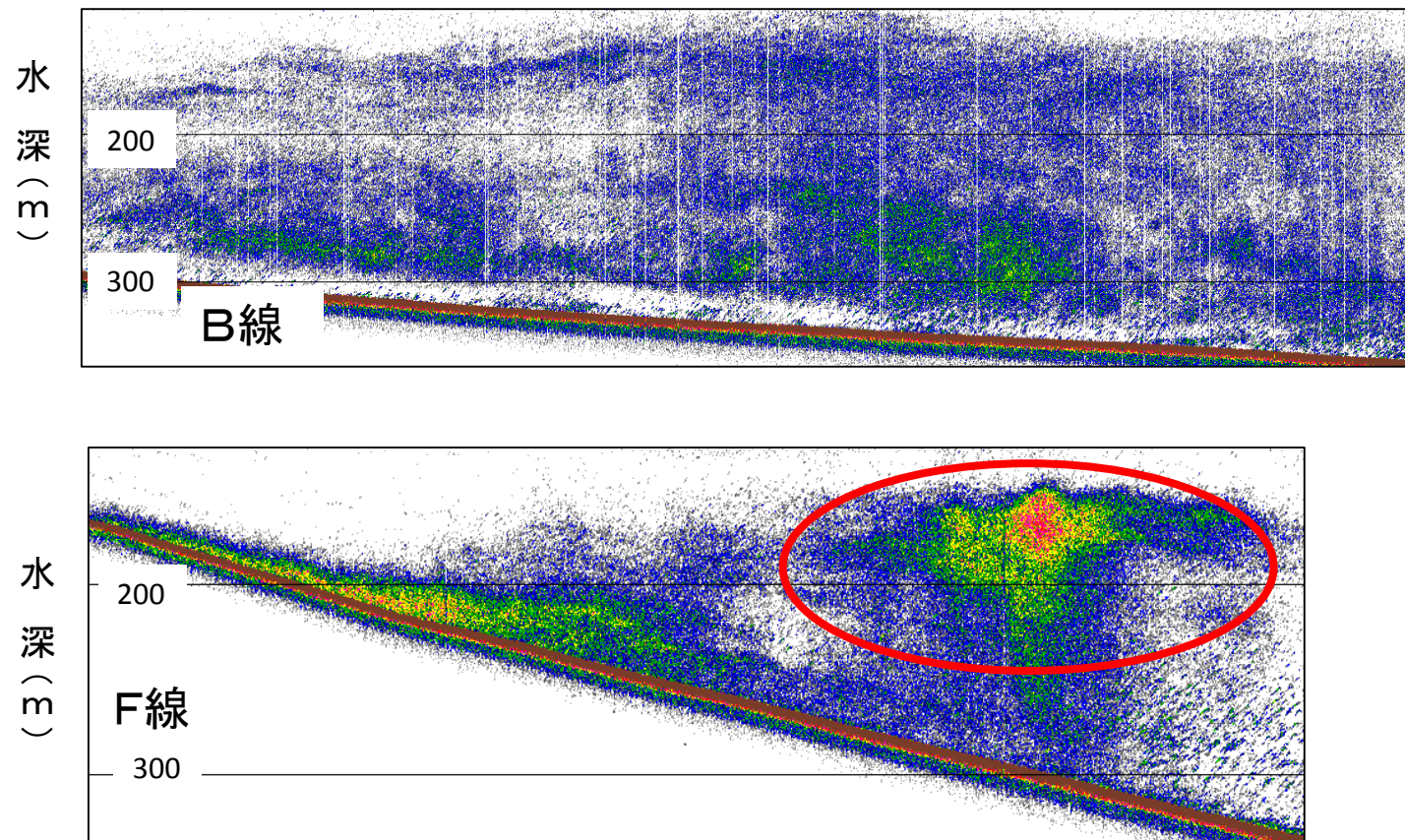


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)
 Fライン上の浮いた反応は未成魚とみられる(赤線で囲まれた範囲)

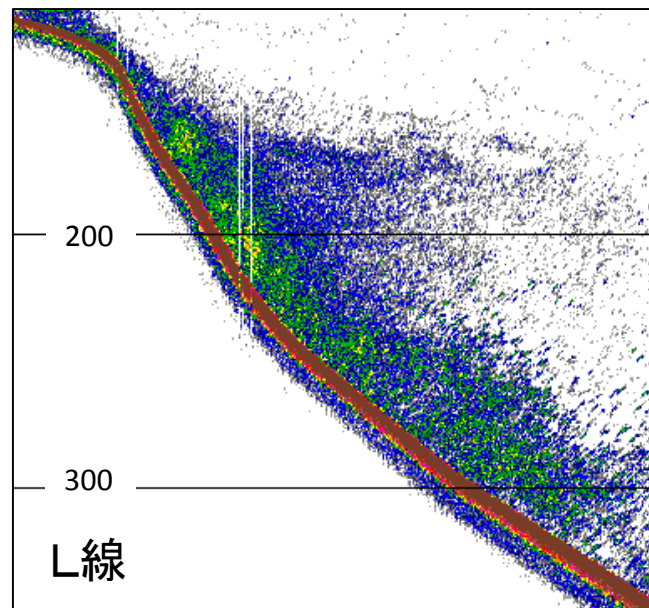
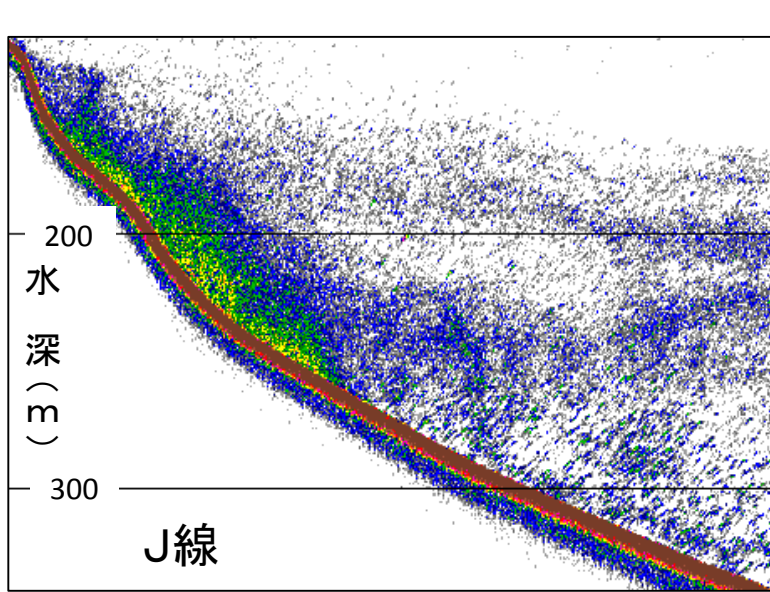
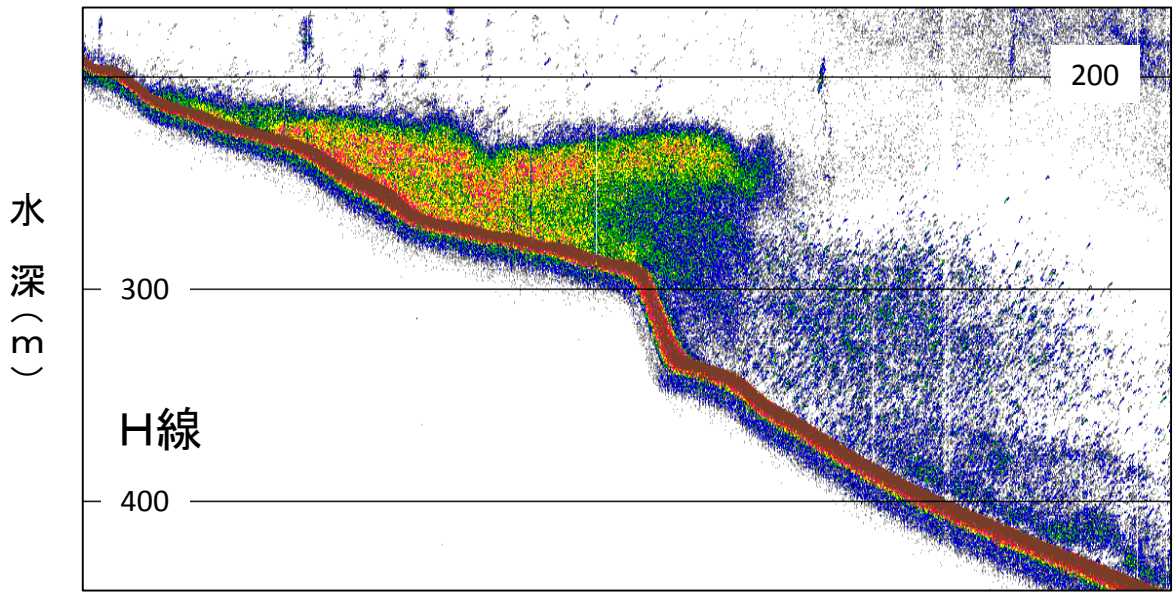


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

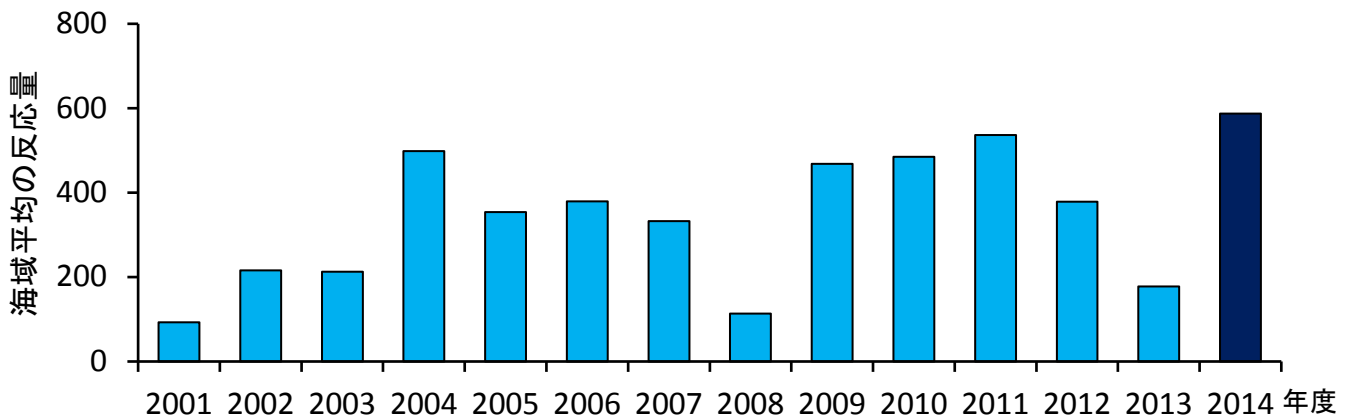


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

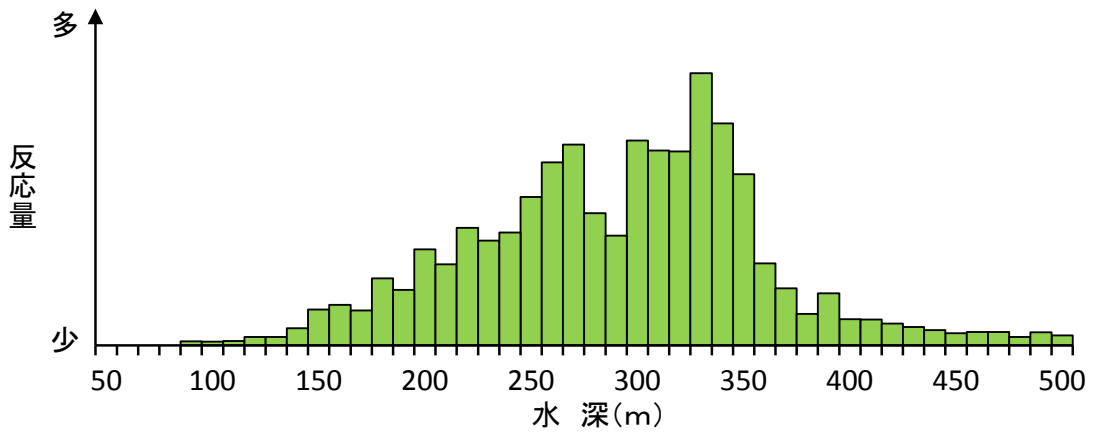


図4 水深別の魚探反応量

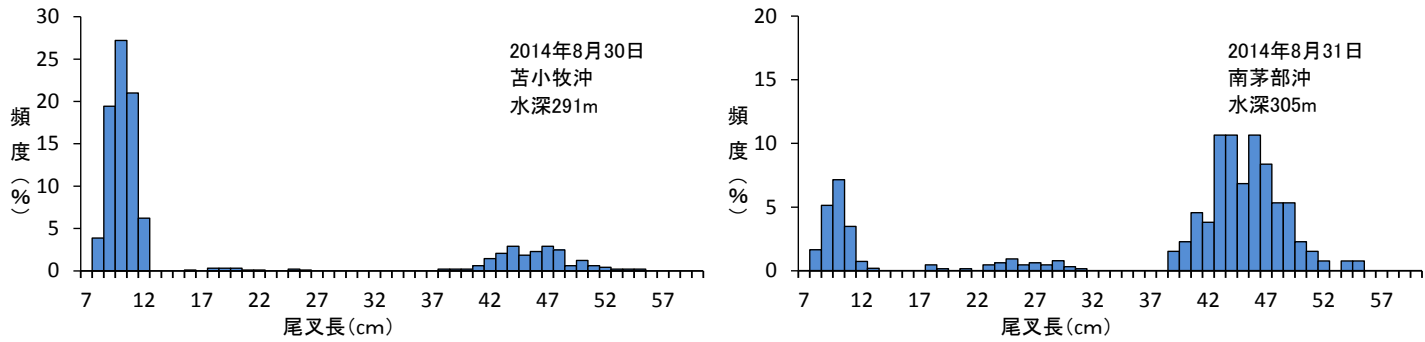


図5 漁獲物の体長組成

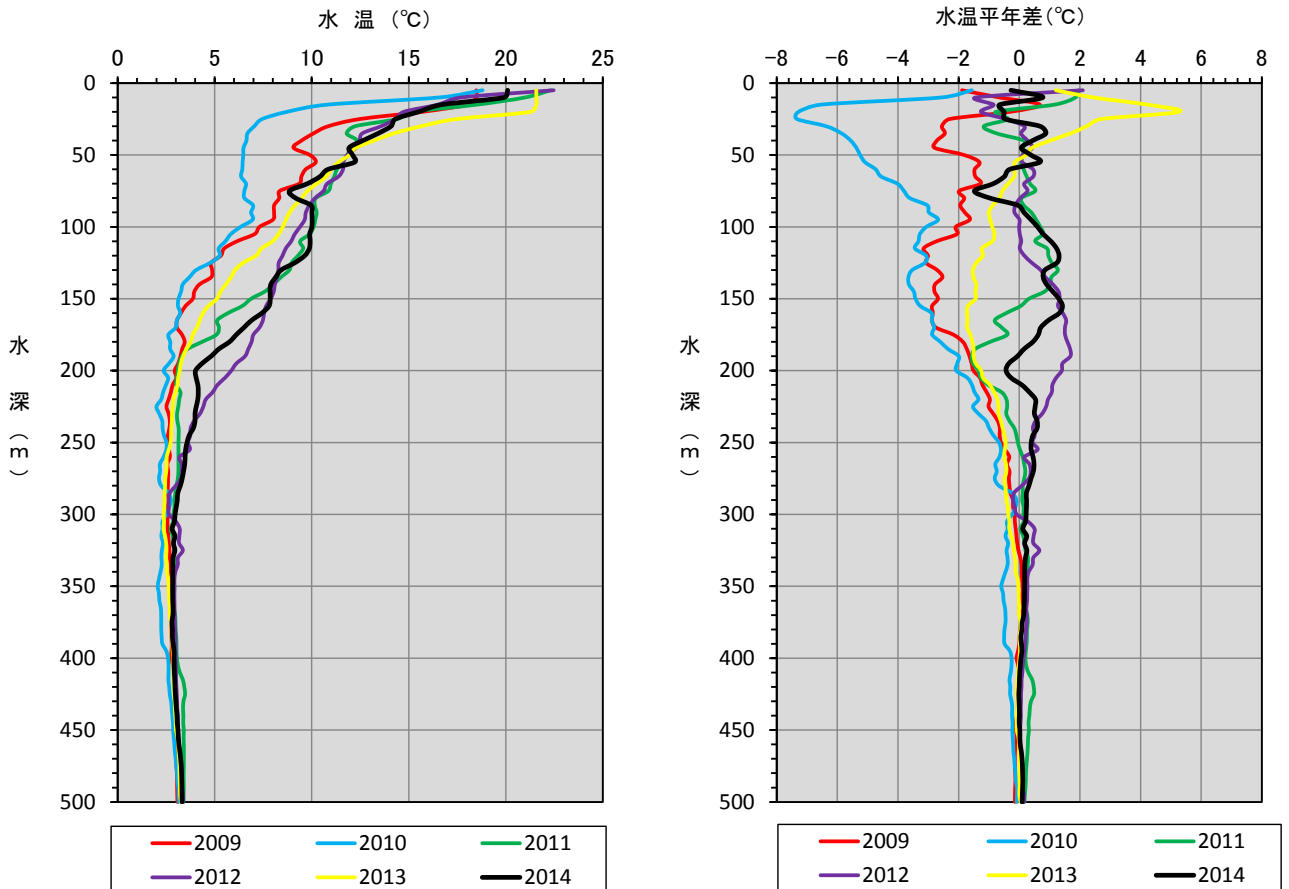


図6 水温の鉛直分布および年差 (8月下旬: 登別沖)